

実践記録 シリーズ 127

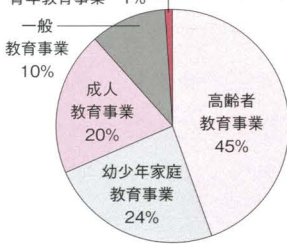
青年学級の歩みと課題

十日町市中央公民館長 廣田 公男

1 はじめに

十日町市(平成20年4月住基人口6万2千人)では、公民館が主催する講座等に参加する市民の数は、年間延べ約4万人になっている。内訳をみると、高齢者が45%を占め、青年層はわずか1%にすぎない。青年層のニーズにどうこたえるのが、これからの公民館運営のキポイントの一つである。現在県内で唯一残っている十日町市の青年学級の歩みを通して、これからの公民館が青年層にどうアプローチしていったらよいか、課題提起をしてみたい。

(図表1)公民館事業参加者の内訳 (H19)

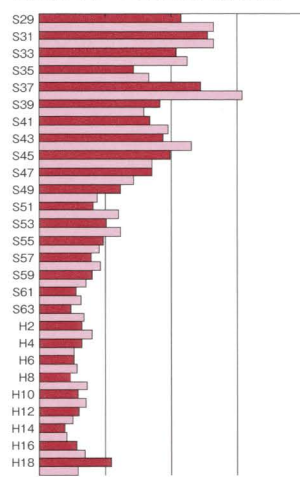


2 青年学級の歩み

十日町市の青年学級は、次のグラフのとおり時代の要請とともに発展し、また時代の変化とともに衰退していった。

青年学級は、昭和23年、戦後の混乱期から始まったが、最初は青年講座といい、勤労青年の補習授業的な要素が強く、講座も英語、数学、国語といったようなものだった。

(図表2)十日町青年学級及び勤労青年ホームの在籍者数の推移



昭和28年に青年学級振興法の施行とともに青年講座から青年学級へと名称変更。

その後コース別学習も始まり、昭和30年代は、学級生がピークに達している。当時十日町では織物業が状況を呈しており、若者が町なかにあふれていたといわれている。

昭和40年以降は、時代が急成長を遂げた時代でもある。しかし、社会の成熟とともに人々の価値観も多様化していった。講座の内容もより現代化し、学級生の確保のため青年のニーズにこたえようといういろいろ苦労したが、学級生はだんだん減っていった。

昭和63年から平成の初めにかけて、バブルがはじけ、不況の時代が始まったが、また、各地で地域おこしが盛んになった時代でもある。青年学級も自治会活動が活発化して、静岡、愛知、兵庫県の青年学級と交流をもつなど一時活性化したが、学級生の減少は止まることはなかった。

平成16年の中越大地震の爪痕は大きく、公民館と並行に活動していた勤労青少年ホームが地震による被害を受け、復旧不可能となり、ついに閉鎖された。それに伴い、ホームと青年学級が合併し、現在に至っている。学級生も2つが合併した当時は一時的に増えたが、現在はまた少なくなっている。

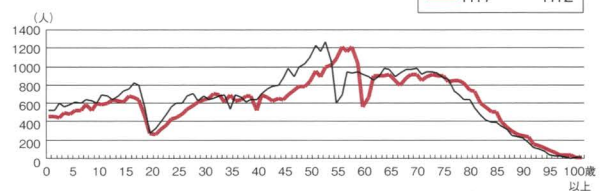
3 問題点

先の図表1のとおり、現在の公民館を利用している年齢層は、半数近くが高齢者であり、その方々はまた、

昭和30年代の青年学級全盛期にまさに青年だった年代でもある。生涯学習は幼少年期からともいわれるが、若い層を今から公民館活動につなぎとめておかないと、将来、公民館の利用者数は激減し、やがて公民館の存在意義が問われる時代がやってくるのではないかと危惧しているところである。

ここで、平成12年と17年の国勢調査結果を比較してみると、子ども、青年層、中堅層が減り、高齢者は増えている。また、団塊の世代の大量退職も間近に迫ってきている。

(図表3)十日町市の人口分布(H17-H12比較)



特に近年、出生者数が急激に減少していることが問題である。25歳から40歳までの人口も減っているのが要因であるが、それにもまして出生者数が大幅に減少しているのが気になる。特殊出生率の減少や未婚者の増加などが影響しているものと思われるが、公民館に青年が集まらなくなったことと多少なりとも因果関係はないのだろうか。

4 課題

そこで、青年教育をどう展開していったらよいかということであるが、社会はますます閉そく感を増し、就業も不安定で、社会における一個人の役割も分業化、細分化され、仕事に生きがいを見出すことが難しくなっている。いわゆる青年の居場所が少なくなっているとよく言われているところである。社会の成熟とともに、個人の欲求は生産活動や仲間づくりよりも自己実現欲求へと移り、それにつれて人々も単独行動を好むようになってきているのかもしれない。



青級ホームフェスティバル (やきものコース)

しかしながら、青年教育に関しては、このような阻害要因だけでなく、促進要因、プラスの面もあるのではなからうか。たとえば、一部の若者の中に、新しい価値観が芽生えていることも感じられる。阪神淡路大震災、中越大地震などを契機としたボランティア活動への参加、環境問題への関心の高さ、NPO活動への参加、都会における田舎暮らしブームなどであるが、今までの効率優先、経済至上主義の時代にはなかった新しい価値観が育ってきつつある。また、行政主導のまちづくりから市民が主体のまちづくりへと方向転換する動きの中で、地域の中に青年の居場所も必要とされるのではなからうか。地域づくりと一体となった社会教育活動が必要である。

必ずしも青年学級にこだわるわけではありませんが、公民館が地域と一緒にあって青年活動のためにどんな役割を担ったらよいか、今まさに正念場ではないかと思っているところである。